日本ＳＯＤ研究会報

特集 丹羽療法 治療レポート

丹羽先生の新刊
アトピーを根本から治す
『奇跡のアトピー治療』
ついに発表される

発行元 日本ＳＯＤ研究会 宮城
住　所 〒158-0094
東京都世田谷区
玉川 1-15-2 Ｂ棟 2802
TEL. 03-5787-3498
http://www.sod-jpn.org/

昨年の東北地方太平洋沖地震により、被害を被られた皆様には、心からのお見舞いを申し上げます。また、被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

丹羽先生はよく言います。アトピー性皮膚炎の症状や患者さんの傾向が劇的に変化したのは、今から40年前、１９７０年代だと。原因は日本の高度経済成長に伴う工場のばい煙、トラックの排気ガスといった環境汚染。フロンガスによるオゾン層の破壊で強まった紫外線、農薬を多用する農業、化学薬品づけの飼料を多用する畜産業。すべては私たちの周りを取り巻く生活環境の急激な変化と大気汚染、食物汚染によって、もたらされた結果だと言います。

丹羽先生は早くからアトピー性皮膚炎の主因は活性酸素だと発表。活性酸素を取り除く生薬の開発と食生活、環境の改善などを組み合わせた独自の丹羽療法で多くの重症化したアトピーを治療してきました。

これまでにもアトピーに関する多くの著書を出版し、それらの本はいまだに売れ続け、隠れたベストセラーになっています。そんななか、更なるアトピーの新刊が出版されました。タイトルは『根本から治す奇跡のアトピー治療』。

帯には「もう悩まない！　素人療法は危険!!　丹羽療法の正しい指導、正しい管理。全国のアトピー患者が信頼し、たった数週間で改善していく丹羽式療法の神髄が一冊でわかる！」と書かれていて、丹羽先生渾身の著書になっています。

今回は、アトピー患者さんにお勧めの食事のレシピ紹介や、よくある質問と題した素朴な疑問にも答えてくれる構成になっていて、非常にわかりやすい一冊です。そこで、さっそく新横浜の診療所に診療にいらした先生にインタビューしてきました。先生は、アトピー性皮膚炎の最新治療に思わぬ危険がはらんでいるという驚愕の事実を教えてくれました。

丹羽先生が明かす 新たなアトピー治療薬 といわれる、免疫抑制剤の危険!!

――先生、今回、新刊としてアトピーの本を出版されましたが、今、このときにどうしてアトピーの本だったんでしょう。

「丹羽療法でわかりやすいアトピーの本がほしいという要望が多かったんです」

――確かに、質問のコーナーなどはうなづくことばかりでした。やはり、こういったアトピーが重症化するとがんになるのか、とかアトピーは遺伝なのか、どこそこの深海水はいいのか、民間療法はどうかといったような質問は多いんですか？

「多い多い。アトピーの仕組みや理屈をなんぼ詳しく書いても、こういう質問に答えるほうが理解してくれる」

――先生がこの本のなかでいちばん言いたいことは？

「全部です」

――やはり、ステロイドや免疫抑制剤を使い続けることは怖いけど、民間療法でいきなり絶つことも危険。正しい知識を持つこと、と言う話が集約されている本ですよね。そんななか、やはりアトピー性皮膚炎の患者さんは増え続けているのでしょうか。

「確実に増えていますね。しかし、ひとつ怖いことがある。これまでうちには重症のアトピー患者さんが来ることが多かったけど、最近、少し減っている。それはどうしてかというと、アトピーの新薬として免疫抑制剤が保険適用になったからです」

――免疫抑制剤を使用すると重症のアトピーでも良くなるんですか？

「これが、一見、症状は良くなるんです。ただし、治しているわけではないから、免疫抑制剤の使用を止めるとすぐにアトピーは出てきます」

――つまり、免疫抑制剤で治っているのではなく、抑えられているということですか？

「そのとおり。免疫抑制剤はずっと使い続けないといけなくなる。使い始めは重症のアトピーも引くから、良かったなあと。しかし、ちょっとしたことで風邪や感染症にかかりやすくなったり、５年、10年と使い続けているとかなりの確率でがんになる。こんなものが２００８年から保険適用になったから、うちに来る重症患者さんの数が少し減っているわけです。恐ろしいことです」

――この免疫抑制剤を使うと、皮膚が硬化しているようなものでもきれいな皮膚になるんですか？

「これがなるんです。引くんです。治ったようになるんです。だから使い続ける。だから怖い。アトピーは命を取る病気ではないのに、そのために命を取る薬を使うのはいかんです」

――免疫抑制剤というのはステロイドよりも効果が出るんでしょうか？

「ある。ステロイドは長く使い続けると糖尿病や骨粗鬆症の危険があるし、見た目にも顔がむくんだりするが、免疫抑制剤は表面的に出

丹羽靭負 著　KK ベストセラーズ 刊
全国のアトピー患者が信頼し、たった数週間で改善していく「丹羽式」療法の真髄が、一冊でわかる

ないし、骨もぼろぼろにはならない。また、ステロイドは急にやめると呼吸困難などを起こして危険ですが、免疫抑制剤は急にやめてもステロイドほどの顕著に危険な症状は出ない」

――一見、素晴らしい特効薬に見えますね。

「だから危険なんです。命を取らないアトピーに命を取る発がん性の免疫抑制剤を使ってはいけない」

――免疫抑制剤と言うと、臓器移植に使われて有名になりましたが、臓器移植の場合でも飲み続けないといけないんですか？

「もちろんそうです。死ぬまでずっと飲み続けないといけない。でも、臓器移植は、今、生きるか死ぬかの問題ですから、５年後10年後に発がんする可能性があってもそれくらいのリスク、背に腹は代えられません。しかし、命にかかわらないアトピーにはいかん。アトピーにとってステロイドがオオカミなら免疫抑制剤はライオンなんです」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

免疫抑制剤が２００８年から保険適用になった話は、初耳でした。誰もが手軽に服用できることを丹羽先生は心配していました。この本には、そんな免疫抑制剤のことも詳しく書かれています。安全に根本からアトピーを治したい、そんな方にぜひ読んでもらいたい一冊です。

◆丹羽先生診察ご希望の方は
御紹介、御予約いたします。
※自由診療となります。
丹羽メディカル研究所
☎０１２０(７３１)１７５
もしくは
日本ＳＯＤ研究会
☎０３(５７８７)３４９８
まで　お電話ください。

ジェナー動物クリニック 院長
長瀬雅之 先生 講演

身体にやさしい動物医療とは？

―食事・生薬療法の実際―

＜後編＞

講演では動物医療の現状について、幅広くお話しいただきましたが、今回はイヌの食事と膠原病における生薬治療の実際を中心に紹介します。

正しい食生活のうえに体にやさしい生薬治療が成り立つ

体にやさしい動物医療とは、毎日の食生活がしっかりしていなければ成立しないものです。つまり、動物の身体に有益な新鮮な油、さらに良質なタンパク質、炭水化物、ビタミン、ミネラルの摂取がまず大前提にあって、そのうえで初めて生薬療法などの体に負担が少ない治療が効果を発揮するのです。

ジェナー動物クリニックでも、丹羽先生が毎日の治療にお使いになっている生薬を治療に用いています（**表1**）。代表的なものをご紹介します。はじめに動物用にアレンジしたＳＯＤ様作用食品で、獣医師専売サプリメントとなっています。

丹羽先生と私で開発した春山は、タキソテールという抗がん剤の成分が含まれているので、サプリメントとして市販はできませんが、免疫調整作用を有する副作用のな

【表１】当院の代表的な生薬

- ＊ 動物用ＳＯＤ様作用食品
- ＊ 春山：タヒボ・天然タキソテール
- ＊ NK-3：冬虫夏草
- ＊ H-TT：ハーペーゴー・TT 茶
- ＊ BWS：枇杷の種
- ＊ BG105：チャーガ
- ＊ BG103：アガリクス

い生薬です。ＮＫ―３は冬虫夏草が主成分で、動物の悪性腫瘍に対する治験を最近開始したばかりの生薬です。ＢＧ―１０５は、寄生すると白樺の木を腐らせるほど生命力があるチャーガから作った生薬で、免疫を活性化する作用が強くがん治療にはよく使っています。ＢＧ―１０３はアガリクス茸から作った生薬で、やはり免疫を活性化したい時によく使っています。その他の生薬は、これまで丹羽先生ががん治療に必ず用いている代表的な生薬、すなわちＨ―ＴＴと枇杷の種を煎じたＢＷＳです。

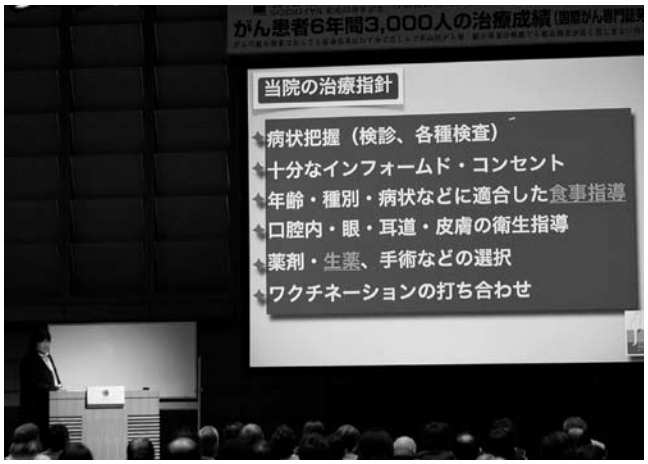
　これら生薬の適応症について説明します。（ヒトの）アレルギーの場合、ＳＯＤとルイボスＴＸを使うのが一般的ですが、イヌやネコのアレルギーにはこれらの生薬を処方することはほとんどありません。基本的に「正しい食生活、正しい外用法を実践して、あとは自力で治ってください！」という気持ちで治療しているんです。ただ、自己免疫疾患となると、薬を使わないと生命が危ぶまれますよね。自己免疫疾患では、ＳＯＤと春山がかなり有効的です。

　がんの場合では、がんの種類によって異なりますが、ＳＯＤ、春山、ＮＫ３、Ｈ―ＴＴ、ＢＷＳ、ＢＧ―１０５などを組み合わせて使っています。動物の場合も、がん治療を一切せずに、「好きなご飯を好きなだけ食べて、残り少ない時間を楽しく過ごしましょうね」という選択肢だってもちろんあるわけです。治療法にはいろいろな選択肢があって、どれを選ぶかは飼い主さんに任せています。

自己免疫疾患には ＳＯＤ＋春山

　自己免疫疾患に対する生薬療法の効果についてお話しします。ヒトではリウマチと言いますが、動物では、ヒトのリウマチに病状が極めて似ていることから、リウマチ様関節炎といいます。本症には生薬療法がとても効きます。ＳＯＤ単独で、症状の著しい改善が見られる症例が大部分を占めています。「なぜこれほどまで効くのか？」その根拠を一生懸命調べていますが、残念なことにまだ解明できていません。

　ＳＬＥ（全身性エリテマトーデス）では、ＳＯＤ＋春山の生薬療法が有効です。しかし、急性期や増悪期にはスパイス的に低用量のステロイドや免疫抑制剤を使わざるを得ない場合もあります。ＤＬＥ（円板状エリテマトーデス）は、獣医領域において診断基準や病態生理が必ずしも明確でない自己免疫疾患です。本症では、ＳＯＤ＋春山の生薬療法、あるいはメサラジンやプレドニゾロンなどの化学療法とこれらの生薬の組み合わせが有効ですが、時に激烈な症状を抑えきれず、助けられないこともあります。私の実感として、ＤＬＥに罹患したメスの場合は、治療に対する反応が良好ですが、オスの場合は反応が非常に鈍く、命を失うことがあるようです。



　無菌性皮下脂肪織炎や天疱瘡といった皮膚における自己免疫疾患では、プレドニゾロンやアザチオプリンなどの化学療法、およびＳＯＤ＋春山の生薬療法を組み合わせて症状を改善させた後に、ＳＯＤ＋春山の生薬療法で維持する方法が極めて有効です。一方、赤血球が壊されてしまうＡＩＨＡ（免疫介在性溶血性貧血）、あるいは血小板が壊されてしまうＩＴＰ（免疫介在性血小板減少症）では、生薬を服用して効くか効かないかなんてのんびりしたこと言っていられませんね。貧血を起こしてぶっ倒れていたり、出血が止まらないのですから、「生薬を飲みなさい」

と言ったって飲める訳がありません。治療の初期段階から化学療法と輸血をするので、これらの疾患における生薬療法については評価ができません。症状が安定した後に、ＳＯＤ単独、あるいはＳＯＤ＋春山を使うことがありますが、それら生薬が効いて良好な状態を維持しているのか、あるいは初期

治療の化学療法や輸血をしたことで維持できているのかが区別ができないのです。

ＭＧ（重症筋無力症）では、臭化ピリドスチグミン単独投与より、ＳＯＤ＋春山の生薬療法を組み合わせた方が、経過は明らかに良好だと思われます。膜性糸球体腎炎などの腎臓における自己免疫疾患に対する生薬療法については、症例数が少なく評価ができていません。その上、本症では嘔吐・悪心があるため、生薬を服用することがなかなか困難なのです。

多くの自己免疫疾患の症例において、ＳＯＤ＋春山の生薬療法は副作用の心配がなく、その上、ステロイドや免疫抑制剤の使用量を確実に少なく、あるいはなくす良好な治療効果を示すと思われます。

（写真を見せながら）、これが代表的な自己免疫疾患のワンコですが、痛々しいですね。このワンコは、無菌性皮下脂肪織炎に加えて血小板減少症も併発しているので、破けた皮膚から血が吹き出てきています。さらに眼内出血とブドウ膜炎のため、片目は失明してしまいました。初期治療では、免疫抑制剤のアザチオプリンを使いましたが、基本的にはＳＯＤ＋春山の生薬療法が主体です。それで、こんなに元気になりました。（治療後の写真を指して）立ち方も凛々しくなりました。肌もキレイになってきましたよね。すごいと思いませんか？

がん治療における生薬療法は？

次はがん治療における生薬療法の実際についてお話ししましょう。すべてのがん治療に共通した概念は「治るとはとても言えない」、すなわち「延命手段にすぎない」ということです。しかし、その延命手段によって、８年以上、ヒトに置き換えると実に40年以上良好な状態を保っているとすると、「治る」とか「延命」といった単純な概念には属さない「がんとの共存」が実現していると言えるのではないでしょうか。イヌにおけるＭＣＴ（肥満細胞腫）は間違いなく悪性腫瘍で、かなり広いマージンを設定した手術、放射線療法、抗がん剤、あるいはｃ―ｋｉｔを標的分子とした標的分子治療が必要といわれる代表的ながんです。しかし、私は当院を開業してから10年以上、〝未治療の〟ＭＣＴに対して前記の治療を実施したことがないのです。すなわち、ＳＯＤ、Ｈ―ＴＴ、そして春山を組み合わせた生薬療法が恐ろしく効きます。正確には、「がんは存在しているけど、身体に一切悪さをしていないで、年齢なりに元気に過ごしている」と申し上げた方がいいでしょう。

ネコのＭＣＴ患者の中には治療開始から５年を経過した子がいますが、16歳にしては元気に過ごしていますね。ＭＣＴは、自虐、生検、手術等の強い刺激が加わると細胞活性が一気に高まり、リンパ節に容易に転移します。こうなると、いかなる治療を施しても、大した効果が得られないのです。リンパ腫ではがん細胞のＴ、Ｂ、ＮＫ型によっても異なりますが、ＳＯＤ、Ｈ―ＴＴ、そして春山といった生薬、低用量のステロイド、そして21～28日毎のビンクリスチンやＬ―アスパラギナーゼの組み合わせで、ＣＯＡＰ（サイクロフォ

スファミド・ビンクリスチン・アドリアマイシン・プレドニゾロン）療法に劣らない延命効果が期待できると思います。

また、生薬療法を主軸に置くことにより、副作用が出やすい化学療法に依存せずに、長期間ＱＯＬ（生活の質）を維持できることが利点と思われます。ワンコのがんで

最も恐ろしい肝・脾臓の血管肉腫でもあえて手術をしないで、ＳＯＤ、Ｈ―ＴＴ、春山、ＮＫ―３、ＢＷＳといった生薬、最低限の化学療法（サイクロフォスファミドとビンクリスチン、時にアドリアマイシン）の組み合わせで少なくとも３～６倍の延命効果が期待できます。とても不思議なのですが、本腫瘍では、ほとんどの症例で摘出手術後２～３ヶ月で亡くなるのです。私はこれを「シンデレラタイム」と呼んでいます。

メラノーマ（悪性黒色腫）は口腔に頻発する黒いがんですが、無色素性黒色腫という、色素のないがんもあり、一般に無色素性黒色腫のほうが悪性度が高いと言われています。本腫瘍では、ＳＯＤ、Ｈ―ＴＴ、ＮＫ―３といった生薬と活性化リンパ球療法を組み合わせることにより、がん縮小および肺への転移抑制効果がみられます。

現在のところ、我々の生薬療法で治療効果がみられるイヌ・ネコのがんは、ザルコーマ（肉腫）なんですね。乳がん、扁平上皮がん、移行上皮がんは症例数が少なく、まだ評価対象には至っていません。また、骨肉腫や肝細胞がんはさらに症例が少ないのが現状です。脳腫瘍については、我々の生薬がＢＢＢ（血液脳関門）を通過できるか否かの評価がまず必要だと思われます。少なくとも、マウスの実験では、ＳＯＤがＢＢＢを通過することを確認しています。

皆さんは「生薬は、副作用が少なく、何となく効くんじゃないか」という漠然としたイメージをお持ちだと思います。ですが、身体にやさしい生薬が十分な効果を発揮する前提条件として、「身体にやさしい生活をしていて、それでも健康を害する場合」であることを忘れないでください。ワンコのアレルギー性疾患では食生活の改善、シャンプー・入浴法やワクチネーションの見直しをすると、多くの症例で著しい改善がみられるため、生薬の服用は必要がないんです。自己免疫疾患では、積極的に服用した方がいいでしょう。とくに幼年期に発症した場合、骨の発育に影響を与えるステロイドを使わずしてほとんどの症例で完治が望めます。しかし、がんの完治は絶対ありえない。だからがんを治すなんておこがましいことは言わないで、「ＱＯＬが維持できて、延命効果が期待できる治療法であれば、積極的に取り入れるべき」というのが私の持論です。ヒトもワンコも苦しい思いをするより、少しでも楽しく過ごした方がいいですよね。

※平成24年３月22日の講演内容に講演者が加筆したものです。

ＳＯＤ様作用食品
体験者の声を
お聞かせ下さい。

難病で苦しむ方たちが、少しでも早く良い治療法に行き当たるように、本誌では愛飲者の声を募集しています。お手数ですが、

〒158-0094 東京都 世田谷区
玉川１-15-2　Ｂ棟2802
日本ＳＯＤ研究会　宮城宛
TEL 03－5787－3498
までご一報下さい。